

Title	バイリンガル・バイカルチャルな個人のアイデンティティ諸相：日系カナダ人のケーススタディーを事例に
Author(s)	横山, 香奈
Citation	大阪大学言語文化学. 2015, 24, p. 101-113
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/77748">https://hdl.handle.net/11094/77748</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## バイリンガル・バイカルチャルな個人のアイデンティティ諸相

—日系カナダ人のケーススタディーを事例に—\*

横山 香奈\*\*

キーワード：アイデンティティ、日系カナダ人、言語／文化継承

This is an exploratory case study to examine the identity fluctuation of Japanese-Canadian male individual, as he acquired the second culture along with the second language. The informant was born and raised in Canada and his ethnicity is Japanese. He acquired the Japanese language and culture from his parents, through his studies at an extracurricular Japanese school, and through his stays in Japan. Even though he was born and raised in Canada, his Japanese language is native-like.

The study revealed that the informant's identity had two major parts, and one showed the "Japanese-ness", and the other showed the "Canadian-ness", and most of the collected data showed a strong identity from the Japanese side. Also, the Canadian side of his identity rose to the surface only when he had a sense of rivalry towards America.

The identity features that showed his Japanese side were seen in the following scenes.

- (1) Modest way to express what he has done.
- (2) Use of Japanese greeting words such as "Itadakimasu" or "Gochisousama."
- (3) Choice of Japanese middle name.
- (4) How to identify his "generation" of Japanese ancestry.
- (5) Japanese fashion style.
- (6) Choice of Japanese language.
- (7) Perspective toward marriage.

Also, the informant appeared to be affected by the second culture acquisition rather than the second language itself. In developing his knowledge of the Japanese language, he was able to learn more about Japanese culture and Japanese people's ways of thinking, and it helped to establish the "Japanese-ness" in his identity. The informant has two sisters, and they are also very fluent in the Japanese language. However, only the informant among the

---

\* Bilingual/Bicultural Identities: The Case of Japanese-Canadian Individual (YOKOYAMA Kana)

\*\* 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

siblings showed a strong Japanese identity. One possible explanation for this behavioral tendency may be the informant's exposure to indigenous Japanese culture for a prolonged period through his stays in Japan in his early childhood, which his two sisters didn't experience.

For this reason, I can set up a hypothesis that "the acquisition of authentic culture" has more impact on the identity formation than "the acquisition of language."

## 1 はじめに

国際化する今日では、親の仕事の都合で幼少期を海外で過ごした個人、国際結婚間に生まれた個人、ある特定の国への興味からその国の外国語を学習する個人など、様々な理由から多言語、多文化を背景に持つ個人が急速に増えつつある。本研究では、中でも特に、歴史的背景からバイリンガル（日本語と英語）・バイカルチャル（日本文化と北米文化）の環境に身を置く北米の日系人のアイデンティティ<sup>1</sup>に焦点を当てたいと思う。そして、同じ北米の日系人研究においても、日系カナダ人の諸相に関する研究は、日系アメリカ人のそれに比して圧倒的に少ないことから、本研究では日系カナダ人に焦点を当てる。

カナダで生まれ育った日系人にとっては、日本語が継承語、日本文化が継承文化となる。日本語と日本文化に関しては、家庭内で親から自然に継承されていたり、日本語補習校を通して学んだり、また近年の日本のポップ・カルチャー普及の煽りを受け、漫画やテレビ番組といったエンターテインメントを通じて自発的に習得していったりと、一口に「日本語・日本文化の継承」といっても様々な手段が存在する。

しかしながら、日系4世、5世の時代へと突入した今、すっかり家庭内から日本語や日本文化が失われ、アイデンティティとしても「バナナ」と称されるような日系人が多いのも現実である。戦後のカナダにおいて、日系人は「模範的マイノリティー」と称され、経済的にも社会的にも高い地位を達成してカナダ社会に同化した。また異人種間結婚も進んでいることから、日本文化の後継者不足の問題を抱えている。そして、その同化の進み具合は、カナダの日系人社会は21世紀には消滅するのではないかという論（新保1980、倉田1983、Kobayashi 1989）が提示されているほどである（山田2000）。

その一方で、量的研究の統計的数字には隠れがちではあるが、世代が進むにも関わらず日本語ネイティブ話者と変わらないほどの流暢な日本語を習得していたり、日本で生

---

<sup>1</sup>「アイデンティティ」とは、自分が何者であるかを知り、私が私であることを確信することである。この語は、「自己（自我）同一性」と訳される事が多いが、元々、精神病理学者のE. H. エリクソンが使い始めた概念である（三宅1997）。

まれ育った日本人と変わらないような日本文化を継承している日系人が存在するのも事実であり、今回本研究で取り上げるインフォーマントもこの例に該当する。

日系人のアイデンティティ諸相についての先行研究は、歴史的経験を異にする1世、2世、帰加2世（カナダで生まれ、一定期間日本で教育を受けた後、再びカナダへ戻った世代）、3世、といった相違を時系列的な世代変化として分析したものも多くあるが（デイ 2000、野崎 2007 等）、これだけ多くの日系人が存在する今、父方から数えた「○世」という数字と、母方から数えた「○世」という数字がバラバラであったり、戦後自由意思で移民した「新1世」と呼ばれる世代も存在することで、そもそも、各インフォーマントをこの世代別分類枠に当てはめること自体が難しくなっている。さらにその日系世代の称し方は自己申告に基づくため、研究者がデータとして扱う際には曖昧さが残る（日系世代の称し方については5.1.4で扱う）。

そして特に戦後は、言語や文化についてのバックグラウンドや習得レベルも千差万別になってきており、また、同じ親に育てられ、同じ食生活を送り、同じ教育を受けた日系人のきょうだいであってさえ同じアイデンティティを持っているとは限らない。つまり、同じ環境に育った者らであっても同じ分類にできないくらいアイデンティティというものは個人差があるため、個人のヒストリーに細かく着目する必要がある。そのため、本研究においては、先行研究の多くにある時系列的な「日系○世の特徴」といった世代分類に重点を置いた分析方法ではなく、一個人の育った言語背景や文化背景に細かく着目したいと思う。また、日系人のアイデンティティに関する先行研究では、マクロな視点で日系社会を捉え、100名強の比較的大きな数のインフォーマントを対象とした質問紙調査があるが（山田 2000 等）、本研究では、自己申告に基づく質問紙からのデータだけではなく、客観的にインフォーマントの日常での思考や振る舞いを分析するため、ケーススタディーを通じて参与観察に重点を置き、ライフヒストリーに着目した一個人の主観的世界の分析をしたいと思う。また、アイデンティティというものは数値では測れない上、量的研究における統計的数字の中からでは平均的特徴から外れたインフォーマントに関する諸相を考察することが困難なため、今回、一個人を取り巻く日常のエピソードを追う手法でアイデンティティ分析を試みたい。

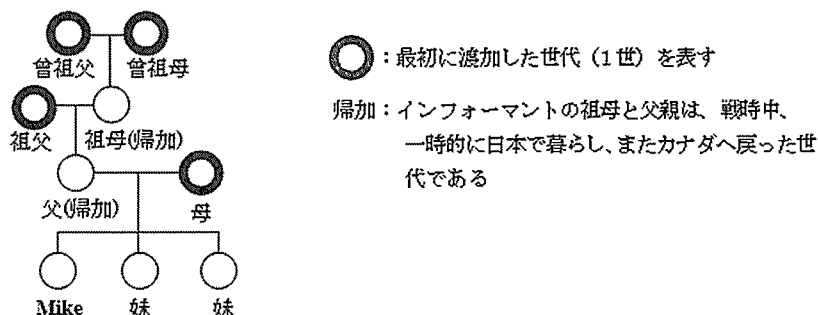
そして、アイデンティティを考察する研究におけるインフォーマント選別についてだが、研究参加への依頼をし知り合ったばかりの個人であると表面的な受け答えに終わってしまいがちでアイデンティティといった本来の個人的内面の特徴を探ることは非常に難しいと感じたため、本研究では敢えて筆者が古くから親しくしている友人を研究対象として取り上げた。また、身近にいる友人であることから、設定した面接時間以外にも普段から多くの「カジュアル」な時間を共有しているため、エピソードを探る機会

もその分多い。そのため今回の研究トピックにおいては、身近な友人を調査対象とするのが最適だと判断した。

## 2 データ収集方法

インフォーマントは、カナダ生まれ、カナダ育ちのカナダ国籍の日系人男性、Mike（仮名）、23歳（研究開始時）である。参与観察から得られたデータを中心に分析し、それを補完する目的で半構造化面接もおこなった。参与観察については、カナダ、そして旅行先のアメリカや日本において実施し、その都度、エピソードをメモに書き留めておいたものである。半構造化面接はカナダにておこない、会話を録音をしながら、その場でメモを取った。これに加え後日のE-mailでのやり取りや電話での会話も含む。

## 3 インフォーマントのバックグラウンド



インフォーマントは父方から数えて日系4世、母方から数えて日系2世にあたる。父親はカナダ生まれであるが、戦時中一時的に日本で過ごし後にまたカナダへ戻った「帰加」と呼ばれる世代である。母親は20代前半にカナダへの興味から自発的にカナダへ移住した「新1世」である。

### 3.1 言語と文化について

生まれて最初に口にした言葉は日本語だったが、学校に行きだすようになり英語が母語となった。家庭内では、父親とは英語で、母親とは日本語で、2人の妹達とは英語で話している。日本語と日本文化の習得については、(1) 両親から、(2) 日本語補習校にて（週1回、2時間）、(3) 日本での滞在期間を通じてである（次の3.2で説明する）。カナダ生まれ、カナダ育ちでありながら、読み、書き、会話のすべてにおいて日本語ネイティブ話者と変わらないような流暢さを身に付けている。

### 3.2 日本での長期滞在について

日本には大きく分けて以下の3回、長期滞在をしている。その時の日本の印象を以下のように語っている。

(1) 9歳の時、2ヶ月間、夏休みを利用して母親の故郷である鹿児島に滞在した。うち10日間は公立小学校の第3学年の学級に特別入学している。これは、母親の、「同年代の子どもたちとの学校生活を通して、ローカルな日本文化や習慣を身につけさせたい」という意向からだったそうだ。

この時点で既に日本語に関しては何不自由ないレベルだったようだが、文化の違いで大きな衝撃を受けたとインフォーマントは語っている。例えば、ランチタイム時において、カナダであればカフェテリアでトレーを持って並びさえすれば、スタッフに食事を配膳してもらえるが、日本では生徒が給食着を着用し、食事を給食室に取りに行くところから始めなければならない。そして、自分たちで配膳をし、食後はまた空容器を給食室へ戻さなければならない。また、学内の清掃に関してだが、カナダであれば業者の人が掃除機で一斉にフロアを綺麗にしていくが、日本では生徒が各自家から雑巾を持参し、掃除のチャイムが鳴るとバケツに水を汲みにいくところから始めなければならない。このように、学校生活において、多くの文化の違いを目の当たりにし、とにかく「へ～、日本の学校ってすごい！」というのが第一の感情だったという。

(2) 21歳の時、ワーキング・ホリデー制度を利用して、東京のホテルで1年間勤務している。ホテル勤務を選んだのは、カナダでもホテルマンをしていたからなのだが、その職業に興味を持ったきっかけは、幼い頃に見た「HOTEL」という日本のドラマを見て、日常とはかけ離れたホテルの豪華さに憧れ、ホテルマンのサービス精神に感動したからだという。このドラマは1990年に日本で放送されたものだが、ほぼリアルタイムでカナダで見えていたそうだ。

そして、日本の文化や習慣についてはカナダにいる頃から知っていたが、実際に日本で働いてみて、「知っているということ」と「それを実際に体験すること」は全くの別物なのだと感じたという。例えば、日本のサービス業では「お客様は神様」の扱いであることも日本に来る前から充分理解はしていたが、実際にホテルの中で客に挨拶をしても無視して通り過ぎられたり、何かをして差し上げても御礼も言ってもらえなかったり、という利用客の傲慢な態度を目の当たりにして、カルチャーショックを受けたと語っている。

さらに、職場でのはっきりした上下関係についても、カナダにいた頃から知っていたにも関わらず、実際に体験することで同様の違和感を覚えたということだ。ただ、それらについても時間の経過と共に慣れ、生活全般において（言葉に関しても文化に関して

も)、何の不自由なく1年間を過ごしたようだ。これについては、観光ではなく就職で来日するにあたって、日本語の敬語の使い方にも長けていたことが、職場中心に回る彼の日本生活を一層スムーズにした要因ではないかと考えられる。そして、この1年間の滞在が彼に大きな気持ちの変化をもたらした。それまでは、「少しの期間、日本に住んでみたいな」という好奇心だったのが、ワーキング・ホリデーの1年間を経てカナダに帰国後は、「将来ずっと日本に住みたい」という気持ちに変わったという。

(3) 三つ目は、「滞在」というカテゴリーに括るのは少し違和感もあるが、27歳の時に日本人女性と結婚し、それ以来日本に在住している。そして現在は、ホテル勤務ではなく、マーケティングの仕事をしている。

#### 4 半構造化面接における質問項目

参与観察データから得られたエピソードを補完する目的で、半構造化面接も実施した。数値では測れない「アイデンティティ」というものを考察するにあたって、インフォーマントへの質問は、以下の事項を尋ねる幅広い内容で構成した。インフォーマントの話が膨らみやすいような項目を入れることを意識して作成した。

- (1) 育った国とは別の国での体験（同化、差別的体験、カルチャーショック等）
- (2) 文化グループ（大学の日本人サークル等）への参加状況
- (3) 二言語（日本語、英語）の使用状況
- (4) 使用言語に対する自己認識
- (5) 民族意識
- (6) 文化（重要視している祝祭日行事、日々の習慣等）
- (7) 親からの影響
- (8) 社会的つきあいにおける民族的志向（ある特定の集団と関わることを好んでいるのか等）
- (9) 第二言語（日本語）、第二文化（日本文化）に対する自己認識
- (10) 第二言語、第二文化が元々のアイデンティティに及ぼす影響についての自己認識

#### 5 データ分析

得られたデータを分析し、分類したところ、インフォーマントのアイデンティティは、「日本人としての強い拘りが現れる部分」、「カナダ人としての強い拘りが現れる部分」とに分けることができたが、圧倒的に前者の特徴が多く見られた。また後者については、アメリカを意識した時に限定されることが示唆された。

### 5.1 データ分析—日本人としてのアイデンティティ

日本語を習得することによって、日本語の本、雑誌、音楽、インターネットのページ、その他様々なエンターテイメントへのアクセスが可能となり、それによって日本語に付随した日本文化や日本人のものの考え方を習得することができ、その「日本人」としての価値観がインフォーマントのアイデンティティ形成へ大きな影響を及ぼしているようである。本人もそのように認識しており、取得したデータを基に筆者側から分析しても同様のことが感じ取られる。ただ単に「流暢な日本語を身に付けている」ということと、それに加え、「言語に付随した日本文化も身に付けている」ということは、アイデンティティ形成において大きな違いを生み出すようだ。では、実際に次の項において、インフォーマントのデータから得られた「日本語に付随した日本独特の文化」の具体例を見ていきたい。

#### 5.1.1 謙遜の文化

インフォーマントは、英語話者の友人との会話の中で、日本語はどれくらい話せるのか問われた時、実際はネイティブの日本語話者と違いが分からないくらい流暢なのにも関わらず、「幼稚園児くらいのレベル」、「多少読み書きができる程度」などと回答している。

また、お土産品を友人に渡す時も、「つまらない物だけど、よかったら使って！」などの言葉をかけている。もちろん、本当につまらない物だと思って相手に贈り物をする人はいないわけであって、典型的な「謙遜の文化<sup>2</sup>」をインフォーマントの会話から見出すことができる。

そして、服装や持ち物を友人に褒められた際も、「いやいや、そんなことないよ。」という返答をしている。このような日本独特の謙遜の文化は、北米文化の人たちにとってはとても奇妙かつ不可解に映る言動のひとつである。そして、彼はカナダ育ちにも関わらずこのような謙遜の文化を身に付けているということは、日本語の習得を通じて、言語に付随した文化も自然に習得した結果なのではなかろうか。

#### 5.1.2 感謝の気持ちを表す食事の挨拶

インフォーマントは、家族のメンバーと英語で会話をしていても、食事の時の「いただきます」、「ごちそうさま」の言葉は必ず日本語で交わしている。その理由として、こ

<sup>2</sup> 日本の文化における「謙遜」の表現は、相手が謙遜表現として解釈した時に丁寧な印象を与え、また、有能に見せるように呈示した場合に比べ好印象を与え高評価を得ることが期待できるものだとされる(大野 2005)。



これらの挨拶言葉をたとえ英語に訳したとしても、「さあ、食べ始めましょうか」、「はい、食事が終わりました」といったような表面的な意味しか残らず、ただの「行動開始、行動終了の合図」にしかならないからだと言っている。

日本語の「いただきます」や「ごちそうさま」という言葉に含まれる、食事を作ってくれた人に対する感謝の気持ち、そしてもっと先を辿ればそこには食材を作ってくれた農家の人たちがいるわけで、その人たちへの感謝の気持ちは、英語に訳した時点で消えてしまう、とも語っていた。そのため、いくら家族のメンバーでの会話が英語でなされていたとしても、食事の時は必ず日本語で「いただきます」、「ごちそうさま」の挨拶を交わしているようだ。

### 5.1.3 日本名の使用

インフォーマントは Mike というファーストネーム、そして日本名のミドルネームを持っている。カナダでは日々の生活の中ではファーストネームを使うのが普通で、何か公的な書類に記載する時など特別な場面を除いてはミドルネームを使用することは滅多にない。しかし、彼は所属する大学の日本人サークルの友人らに、ミドルネームの日本名で自己紹介をし、彼の友人らも Mike のことを日本名で呼んでいる。苗字も名前も日本名、そして日本語も流暢、顔も日本人、となると一見すると日本からカナダに英語を勉強しに来ている留学生のように見てとれるわけだ。

実際ある時、Mike と彼の所属する大学の日本人サークルの友人ら、そして筆者らの友人グループを含めた大勢でバンクーバーのレストランに行ったことがあるのだが、筆者を含めた数人が「ねえ、Mike !」と呼びかけた際、Mike のサークル友人らが「え？ Mike って誰？」と尋ねてきたことがあった。そしてウェイターに注文内容を伝える Mike の英語を聞いて、彼らは「めちゃくちゃ英語うまいね〜。」と Mike に話しかけた。彼らは普段 Mike と日本語のみで会話をしているので、その時に初めて Mike の英語を聞いたようだ。そして、Mike はサークルの友人らに「だって僕は英語が第一言語だから、英語がうまくて当たり前だよ。」と笑った。そこで初めて、サークルの友人らは Mike がカナダ生まれ、カナダ育ち、カナダ国籍であることを知り、「Mike」という名前がファーストネームであることも知ったのである。サークルの友人らはその事実には驚いていたようだが、筆者側は、普段いつも遊んでいる大学の友人にすらバックグラウンドを何も話していない Mike の様子に驚いた。そして、その理由を彼に尋ねたところ、バックグラウンドを聞かれたらもちろん話すし、隠すつもりも全然ないけれど、より「日本人っぽく」思われたいからミドルネームの日本名を使うし、聞かれない限りはバックグラウンドも大学の日本人の友人に自らは説明していないということだった。

#### 5.1.4 日系世代の称し方

日系人の世代の称し方については、きちんとしたルールがあるわけでもなく、父方から数えての世代を称している個人もいれば、母方から数えての世代を称している個人もいる。また、父方から数えた世代と母方から数えた世代の中間値を称している個人もいる（例えば、父方から数えて3世、母方から数えて2世の個人であれば、「2.5世」と称する）。その自己申告された称し方の理由も、「父方から数えるのがルールと誰かから聞いたから」や「友人の誰々ちゃんも、母方から数えているし」といったように、かなり大雑把な回答が得られるのが多いのも事実である。

しかし、Mikeの場合は、大変明確な意思を持って自らの世代を称している。彼は父方から数えて日系4世、母方から数えて日系2世になるのだが、日本人の友人に日系何世なのか尋ねられると「日系2世」と回答している。その理由を尋ねてみた。すると「人はたいい『日系4世、日系5世』と聞くと、俗に『バナナ』と称されるように外側だけアジア人顔で中身はすっかり西洋化してしまっているのだらうなと推測するに違いない。しかし、『日系2世』と聞くと、まだまだ「本物 (authentic)」の日本文化をきちんと継承していて、見た目も中身も「本物の日本人」なんだろうなと推測するだろうから」と答えた。つまり、「日系4世」と回答することによって、話し手の日本人に、「中身はすっかり西洋化してしまっているのだらうな」と思われるのが嫌だということであった。より「日本人らしく見られたい」という思いから、世代を尋ねられた際には、「日系2世」と答えるということだった。しかし、これも隠しているわけではなく、聞かれたら父方から数えると4世であるということも話すつもりだそうだが、実際のところは、特に北米移民史に興味・関心のある個人でない限り、「父方から数えて?」、「母方から数えて?」などの深い質問をしてくる人はいないわけなので、通常はただ単に「日系2世です」の回答で済ませているようだ。

#### 5.1.5 「日本人らしい」外見への執着

インフォーマントの出身地、バンクーバーはアジア系移民やアジアからの留学生が多いこともあり、一見したところ何人（なにじん）なのか見分けが付かないことが多い。Mike自身も中国系やフィリピン系と間違えられることがあるらしく、それがどうしても受け入れがたいようで、より「日本人らしく」見られることに相当な執着心を持っている。日本のファッション雑誌を参考にし、日本人スタッフが働いている美容院に通っているのだ。それらの日系の美容院は、カナダ人の経営するところに比べて少し値段が高いのだが、日本人がカットするため、より日本人らしくなる、とMikeは語っている。服装についても髪形についても、自分がどれを好きかということより、どれがより日本

人っぽく見えるかという基準で選択しているようだ。

またある時、Mike はバンクーバーのアジア系の人々が多く行き交うストリートで、観光客に日本語で「すみません」と地図を片手に道を尋ねられたことがあった。彼は、「顔を見ただけだと、何語を話すのかも、何人（なにじん）であるのかも分からないはずなのに、第一声が日本語での声かけだったということは、僕の容姿が日本人っぽくみえたからだよな？」と話し、とても喜んでいただこともあった。

### 5.1.6 日本人らしさを示す「ツール」としての日本語使用

Mike の言語使用については、相手が英語しか話せない人であれば英語を話すし、日本語しか話せない相手であれば日本語を話すというのがまずは基本になっているが、では、相手も英語と日本語が話せるバイリンガルであった場合はどうなのであろうか。その場合は相手の「より得意な方の言語 (stronger language)」を使うということであった。バイリンガルと一口に言っても、二言語の流暢さレベルには違いがあることが多い。例えば、日本から来た留学生であれば、彼らは英語より日本語の方が強いわけなので、そのような相手には日本語を使い、自分の妹達に対してであれば、日本語より英語の方が強いので英語を使っている。だが、日本人留学生の友達であっても、英語がかなり流暢な人とは英語で話すことが多いそうなのだが、その会話の中でも日本語の語彙を意図的に会話に混ぜたりすることがあるという。それは、「日本人同士」としてのコネクションを強調・共有したい時だと Mike は説明した。つまり、Mike にとっての日本語とは、単に、意味や感情を伝えるための手段ではなく、自己の日本人としてのアイデンティティを示すための「ツール」にもなっていると言える。Wardhaugh (2002) は、「個人の言語チョイスとは、自分が他人にどう見られたいかを反映するものである (筆者訳)」と定義しているが、Mike の場合もこれに該当すると言えるであろう。

### 5.1.7 結婚感

今現在は日本人（日本育ち）と結婚しているが、インタビュー当時は未婚であり、将来の結婚相手に関する質問について、「自分と同じような日系カナダ人、もしくは日本育ちの日本人がよい」と話していた。その理由として、「自分の子どもにも日本語と日本文化を継承したいから」ということを挙げていた。

しかし、次のような出来事もあった。ある時、食事をしながら、Mike、筆者を含めた友人らで結婚についての会話をしている時、「Mike は日本語と日本文化とが分かる人がいいって言ってたし、Katy (仮名) なんていいんじゃない？」という話を持ち上がった。この Katy という女性は、Mike の友人で、台湾系カナダ人である。ただ、台湾語は

話さないし、台湾にも一度とすら訪れたことがなく、親の都合で幼少期から日本とカナダを行き来する生活をしてきたため、言語的にも文化的にも Mike 同様、日系カナダ人のような育ち方をした個人である。すると Mike は、「いやいや、彼女は確かに日本語も日本文化も完璧に分かるけど、血は台湾人だからね。日本人じゃないし。」と答えた。聞くと、Mike は家系の中に日本人以外の血を絶対に混ぜたくないという。つまり、「日本語と日本文化を子どもに継承したいから日本人と結婚したい」、というよりも、それに加えて日本人としての「血統」の部分に大きな意味があるようだ。それについて尋ねると、彼は、“Because, I am Japanese!” と付け加えた。ちなみに彼の 2 人の妹達は共に日本にルーツを持たないカナダ人と結婚をしており、きょうだいの中でも Mike だけが「家系の中に日本人以外の血を混ぜたくない」という強い拘りを持っているようだ。

## 5.2 データ分析—カナダ人としてのアイデンティティ

上で見た通り、インフォーマントのデータからは「日本人としてのアイデンティティ」と分類できるものがほとんどであった。「カナダ人としてのアイデンティティ」に分類できるデータがほとんどない中、唯一、カナダ人としてのアイデンティティが強く出ている行動があった。それは、彼がアメリカを意識した時である。例えば、アメリカの美術館と一緒に訪れた際、ゲストブックに“I liked the colour! – Mike”というコメントを残し、「colour」の単語部分にアンダーラインを引いていたことがあった。そして、“Well, just to show my identity.” と語った。アメリカ英語では「color」の綴りを使う中、敢えて「colour」の綴りを記し、アメリカとの違いを強調することでカナダ人としての自分を表現したかったようだ。

また、半構造化面接の質問リストの中で、「カナダやカナダ人に対するコメントやジョークが気にかかることがありますか?」という質問項目があったのだが、「程度にもよるが、カナダをからかうようなコメントは嫌だ。特に、アメリカ人から言われるとなおさら嫌だ。」と回答している。

このように、アメリカという対象があった時に初めて、カナダ人としてのアイデンティティが強く表れることが分かる。

## 6 おわりに

本研究で扱った日系カナダ人のインフォーマントの場合、データを分析、分類したところ、「日本人としての強い拘りが現れる部分」、「カナダ人としての強い拘りが現れる部分」とに分けられたが、圧倒的に前者が多く見られた。また後者についてはアメリカを意識した時に限定されることが示唆された。

また、Mike の 2 人の妹達と比較した際、3 人とも同じようにネイティブ日本語話者と変わらないような高い日本語力を習得しているにも関わらず、Mike のみが突出して非常に強い日本人としてのアイデンティティを示している（妹達と接した時間は Mike と接した時間より少ないためエピソードも少ないのだが、少なくとも Mike が示したような「日本人としての強い拘り」の特徴は妹達からは見られない）。これを説明する要因として、Mike の幼少期や青年期における日本での滞在を通じての日本文化への接触が考えられよう。3 人の中で Mike のみが中・長期の日本での滞在を経験している。このことから、アイデンティティ形成に影響を及ぼすのは「言語の習得レベル」よりむしろ、言語を学ぶ過程における「言語に付随した文化の習得」なのではないかと推測する。つまり、その国の言語を話せるということは自分のアイデンティティを示すための一手段にはなりうるが、絶対条件ではないのではないか。例えば、(1) 日本語が流暢にしゃべれるからといって必ずしも日本人としてのアイデンティティを継承しているわけでもなく、また逆に、(2) 流暢な日本語を継承していなくとも、日本文化の習得によって日本人としての強いアイデンティティを継承することが可能なのではなからうか。このような仮説を立てるとともに、今回は 1 人のデータから得られた推測であるため、より多くのインフォーマントからのデータを得てこの仮説を検証することを今後の課題にしたいと思う。さらに、きょうだい間のアイデンティティ比較についてだが、今回は研究当初から姉妹たちと比較することを視野に入れていたわけではなかったため半構造化面接も姉妹たちには実施しておらず、Mike の「日本人としての強い拘り」を示すデータが出た後で、そういえば妹達にはそのような特徴がないと気付いた事が多かった。今後は、アイデンティティの諸相を探る中で、もっと精密なきょうだい間の比較も課題としたい。

## 参考文献

- 綾部恒雄・飯野正子編 (2003). 『カナダを知るための 60 章』明石書店
- Carbaugh, D. (1996). *Situating selves: The communication of social identities in American scenes*. New York: Albany State University of New York Press.
- デイ多佳子 (2000). 『日本の兵隊を撃つことはできない—日系人強制収容の裏面史—』芙蓉書房出版
- Hing, B. (1997). *To be an American: Cultural pluralism and the rhetoric of assimilation*. New York: New York University Press.
- 飯野正子 (1997). 『日系カナダ人の歴史』東京大学出版会
- Makabe, T. (1998). *The Canadian Sansei*. Canada: University of Toronto Press.
- 三宅正純 (1997). 「アイデンティティ」星野勉・三嶋輝夫・関根清三編『倫理思想辞典』

山川出版社

村上由見子 (1997). 『アジア系アメリカ人』 中公新書

野崎京子 (2007). 『強制収容とアイデンティティ・シフト—日系二世・三世の「日本」と「アメリカ」』 世界思想社

O'Driscoll, J. (1999). Language choice as identity construction in Pan-Europe interaction—a case study. *Language, Culture and Identity*. Copenhagen: Aalborg University Press.

大野敬代 (2005). 「日本語における謙遜表現とその機能」 『学術研究 (国語・国文学編)』 第 53 号 . 早稲田大学教育学部

佐藤郡衛・片岡裕子編 (2008). 『アメリカで育つ日本の子どもたち—バイリンガルの光と影』 明石書店

Wardhaugh, R. (2002). *An introduction to sociolinguistics*. Massachusetts: Blackwell Publishers, Inc.

Watkins-Goffman, L. (2001). *Lives in two languages*. Ann Arbor: University of Michigan Press.

山田千香子 (2000). 『カナダ日系社会の文化変容』 御茶の水書房

Yoshida, K. (1999). Sociocultural and psychological factors in the development of bilingual identity. *Feature Article in Bilingual Japan*, 8 (5-9).